

COMMERCIAL PHOTO

2016/3

コマーシャル・フォト

別冊付録

春のスタジオガイド

YAMA 山添雄彦

年間CMベストテン

話題を作れ
シェア時代の
OOH&配信動画



今月のBOOK

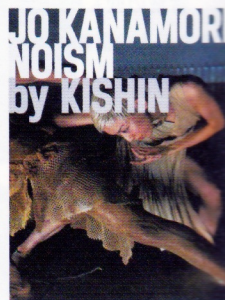
コマーシャル・フォトが
注目する、写真集
広告関連本をご紹介します

『JO KANAMORI NOISM by KISHIN』

篠山紀信◎写真



本体4,300円＋税／A4判変型／192P／バイ インターナショナル／pie.co.jp/

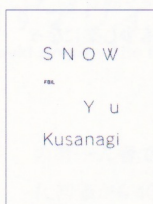


篠山紀信氏が演出振付家・全森穰 率いる舞踊団「NOISM (ノイズム)」を10年間に渡って追い続けた。同カンパニーの筆頭舞踊家・井関佐和子氏を始めとするプロフェッショナルの肉体美や身体表現から生まれる躍動感と力強さを篠山氏の視線で切り取った。

『SNOW』

草薙裕◎写真

秋田県出身の写真家 草薙裕による初の写真集。幼い頃から雪に親しみ、特別な思いを抱いてきたという草薙氏。まるで星のように雪が舞い降る様子は非常に幻想的だ。一枚一枚に雪の神秘的な美しさが宿る。



本体3,200円＋税／A4判／96P／FOIL／www.foitokyo.com/

『新宿迷子』

梁丞佑◎写真

韓国出身で東京を拠点に活動する梁丞佑。小銭を加えたカラス、全身刺青の男、出動する警察官、路上で遊ぶ少年…全て1998年から2006年にかけて新宿で撮影されたモノクロ写真だ。人間のエネルギー渦巻く街の気迫が伝わってくる。



5,000円(税込)／A4判縦／147P／禅フォトギャラリー／www.zen-foto.jp

『運命の交差点』

土田康彦◎著者
高井哲朗◎写真

世界的に活躍するヴェネチアン・ガラス・アーティスト土田康彦の最高傑作をフォトグラファー高井哲朗氏が撮影。20年間の活動から生まれた56点を掲載。ガラス表面に施された繊細でしなやかな曲線が光の中で色彩と共に美しく輝く。



本体3,000円＋税／297×202.5mm／120P／ADP／ad-publish.com/

『朱の記憶 亀倉雄策伝』

馬場マコト◎著

1964年の東京オリンピックのエンブレムをデザインした人として、その名を知られている亀倉雄策。彼はデザイナーの域に留まらず、「国家運営や企業経営とデザインは一体であるべき」と説いた。そんな亀倉の仕事と生涯を振り返る。



本体1,800円＋税／四六判／328P／日経BP社／0120-255-255



次世代に残すべき写真を
東京・六本木 Zen Foto Gallery

ギャラリーの特徴：2009年オープン作家のはか、アジア諸国（主に中国）の作家の作品を取り扱っている。点による、批判性・事件性を伴った写真作品。
スペース：無（企画展のみ）
料金：約3～4週間
持ち込み：受付可。プロフィールやWebを見て、ギャラリーに合いそうな場合はアーク氏と協議する。
アーティストの発表方法：写真展や写真集などを見て発掘。
売時は相談可
プリント販売：有
DM・リリース配信：有
客層：20～40代。男性の割合が高い。外国の観光客も多く訪れる。

特長・利用方法

住所：港区六本木6-6-9ピラミッドJL208号室
最寄り駅：日比谷線六本木駅より徒歩5分
TEL：080-4652-7058
開館時間：12:00 - 19:00
休館日：日・月・祝日
URL：www.zen-photo.jp/

INFO

Courtesy of Chan Wai Kwong



次回の写真展

陳偉江
「油麻地」

2016年2月16日～3月5日

香港で生まれ育ち、独学で写真を始めた陳偉江。150年国際都市としての香港と、その裏にある部分を現地人ならではの視点で撮ってきた写真展。

六本木の麻布警察署のすぐ裏にあるピラミッドビル。いつものギャラリーや店舗が並ぶビルの2階にあるのが、Zen Foto Galleryだ。今回、話を伺ったのは台湾出身のマネージャー、アマンダ・ローさん。イギリス人のオーナー、アーク・ピアソン氏と二人三脚でギャラリー運営を行っている。写真展は、大きく3つのパターンに分かれている。日本の若手写真作家の写真展、アジア各国の若手から大御所ま

での写真展、そして日本の著名写真作家の写真展だ。その中でも、ギャラリーの核となるのが「批判性・事件性のある作品」だという。Zen Foto Galleryでは写真家が発表の場所を提供したい（アマンダさん談）。20年後に風化してしまわないように、作品発表の場を提点で作品を見ることができ。世界に通じる写真作家の作品、次の世代に残すべき作品を発表していきたいと思っています（アマンダさん談）。

Zen Foto Galleryでは写真家が発表の場所を提供したい（アマンダさん談）。20年後に風化してしまわないように、作品発表の場を提点で作品を見ることができ。世界に通じる写真作家の作品、次の世代に残すべき作品を発表していきたいと思っています（アマンダさん談）。